

ジョルジュ・バタイユにおける聖性について —— 〈異質学〉における〈物質〉と〈社会〉

林 淳

Sur le sacré chez Georges Bataille : la matière et la société dans l'hétérologie

HAYASHI Jun

1 はじめに

本稿の目的は、ジョルジュ・バタイユ (1897-1962) が 1930 年代に〈異質学 (l'hétérologie)〉と称して行った思索の内実を考究し、〈異質学〉が〈物質 (matière)〉と〈社会 (société)〉という二つの要素を根本的な仕方で内包している点と、それぞれの語の筆路を明らかにすることである。社会と物質という語を一見した際、É・デュルケム (1858-1917) が論じているような社会の機能的な性格が、物質の具体性からかけ離れた内実を持つ概念であると判断され得る。しかし本稿では、バタイユにおける〈物質〉が観念論を攻撃する特殊な文脈において持ち出された語彙であることを根拠に、それがフランス社会学を読んだ彼の〈異質学〉において矛盾しない仕方で〈社会〉と合流する次第を把握する。つまり関連性を見出しにくい〈物質〉と〈社会〉を敢えて結び付けて論じることで、この時期のバタイユが〈異質学〉として展開していた思想——観念論批判がそのまま〈異質的なもの〉を探求し続ける態度と結びついた思想——の見取り図を用意するのである¹。

そのために本稿は、まずバタイユが〈異質学〉を開始する経緯から出発する (第 2 節)。そして「サドの使用価値」において積極的に論じられている〈異質学〉の内実を読解し (第 3 節)、次にバタイユが筆頭となっていた『ドキュマン』誌 (1929-1931) に遡って〈物質〉の意味を探る (第 4 節)。その後 30 年代のテキストを再度参照しながら、〈異質学〉における社会学の位置付けと〈物質〉と〈社会〉との合流を明らかにする (第 5 節以降)。

2 〈異質学〉の形成

本節ではバタイユが〈異質学〉という立場を採るまでの過程を確認する。というのも、ここで論じる彼の態度が第 3 節以降で見る〈異質学〉の内容及び、〈物質〉が意味するところ

のものと連続的なものだからである。バタイユは低俗で不潔なものへの執心に関して度々批判されており、30年頃にはシュルレアリスムの代表者と言えるA・ブルトン(1896-1966)との間で論争が勃発している。そして〈異質学〉という立場は、この論争の状況下で形作られている。〈異質学〉の形成は、『老練なもぐら』と超人および超現実主義者なる言葉に含まれる超という接頭辞について(以下「老練な」とする)や「サドの使用価値」(以下「サド」とする)などから見て取ることができ、本節では「老練な」を確認する²。

さて、ブルトンとバタイユの論争について概観すれば以下のようなになる。この論争は、フロイト的な無意識を自動筆記などの詩的表現において追求していたシュルレアリスム運動に倦怠が見え始めた時期に勃発したものである。バタイユの下劣な主題の論文についてブルトンがシュルレアリスムの道徳的立場から攻撃し、それに対してバタイユがブルトンの観念論的な理想主義について反撃するという展開である³。

しかし「老練な」は単なるブルトンへの攻撃を超えて、バタイユ自身が強い影響を受けたニーチェをも含めた、「超^{シュル}」という接頭辞に見られる上方志向を批判している。バタイユはニーチェが権威と道徳に対して徹底的に反抗している点で、彼の思想を「支配階級のイデオロギー的な形態の一つだと規定することはできない」(VT, II, p.99〔221〕)と留保しているが、本来下方に位置づけられる〈笑い〉や〈性〉さえもニーチェが上方へ位置づけて、超人として絶対視する傾向については厳しく指摘している(同時に上方志向が専制的な支配と結びつくことを指摘している)。バタイユはこのような低いものを高みへ位置づけるニーチェ像と関連付けながら、シュルレアリスト達を非難している。

同じような〔高低の〕二重になった傾向は、優秀で天上の価値の優越を当然のごとく保持する現在のシュルレアリスム(surréalisme)のうちにも見出される(それは、上にと示す接頭辞のシュル^{sur}(sur)が加えられていることであからさまに表現されている。そしてこの接頭辞は、ニーチェが超人^{surhomme}(surhomme)という表現を用いることで陥った罠でもある)。もっと正確に言うと、シュルレアリスムは、低いものの価値(無意識、性、卑猥な言語など)との関係によって、〔他の立場と〕ただちに区別されるのだが、問題は、これらの価値をもっとも非物質的な(immatérielles)価値に結びつけることで、それらに卓越的な性格を与えている、という点である。(VT, II, p.103〔226-227〕)

この箇所は論文全体の端的な要約であると同時に、ブルトンとの論争におけるバタイユの立場を表している。つまりバタイユが指摘しているのは、シュルレアリスム運動が低俗なものを取り扱いながらも、それらを「非物質的な」、すなわち観念的なものへと抽象化している点である。そのことを政治的文脈から言い換えれば、バタイユにとって当時のブルトンとは、マルクス主義に同意しながら革命を目指して、「下部構造(infrastructure)」に解決策を見出したにもかかわらず、その解決策を上方に理念として掲げる「空論家」なのである。こ

ここでバタイユは、ブルトンを揶揄するのと並行して、革命を起こす下方の〈異質的な (hétérogène)〉運動が〈同質的な (homogène)〉支配下に置かれることを危惧している。この〈同質性〉と〈異質性〉という捉え方を初めて主題化した論文が「サド」である⁴。

3 〈異質学〉の内実

バタイユは、シュルレアリストがサドを抽象化して自由に使用していることを「ごまかし (détournement)」であると指摘して、サドの思想が彼以前のものとは〈全く違う (tout autre)〉ものであり、それが〈排泄 (l'exclusion)〉を導入すると主張する。つまりバタイユはサドを主題化することが、〈同質的なもの (l'homogénéité)〉から〈排泄〉される、理解不可能な〈異質的なもの (l'hétérogénéité)〉を探求すること、すなわち〈異質学〉の一形態であると考えている。しかし〈異質的なもの〉とはそもそも定義不可能であり、曰く「非合理的とかいったいくつもの否定的な言い方をされ得るだけ」(IVU, II, p.63 [257])の要素である。従ってそれを探求する方法を模索する必要性があり、そのために〈排泄〉が導入される。

〈排泄〉とは〈獲得 (appropriation)〉と対比される概念である。そして〈獲得〉は〈異質的なもの〉に対する文脈において、抽象化、すなわち人間に執拗な「ごまかし」のシステムである。それ故、まずは「ごまかし」を暴かなければならない。バタイユは人間的な〈獲得〉について以下のように説明している。

人間は食物ばかりでなく、自分の活動が生み出すさまざまな産物、すなわち衣服、家具、住居、生産のための道具などをも自分のものとする (s'approprié)。[……] このような獲得の作用は、所有者と所有される対象との間に、大なり小なり協約によって同質性 (同一性) を打ち立てるという方法によって行われる。(IVU, II, p.60 [250-251])

ここではバタイユが、食事の例をはじめとした全般的な人間の活動を〈獲得〉として捉えていることが分かる (外的な対象について咀嚼や労働を通して自己へ同質化していくというこのプロセスは、ヘーゲルの思想を吸収することで、後のバタイユによってさらに深化して捉え直される)。バタイユはこの〈獲得〉と〈同質性〉の在り方が、有用性や合理性に執着する人間の態度であると提起しているのである。そのうえで彼は〈獲得〉が「周期的なリズム」で〈排泄〉をもたらすと考えている (IVU, II, p.59 [249])。

バタイユはサドの食糞譚から出発しながらも、実際の食事と排泄のリズムを根拠に、理論的な意味での〈獲得〉と〈排泄〉の周期性を論じている。そして〈獲得〉と〈排泄〉は、同質化とその限界点という仕方で捉え直され、哲学の体系的思索にも議論が展開する。すなわちバタイユによれば、哲学に代表される「知的なプロセス」は、その思索の限界点において「定義からして同質的な要素へのみ適用し得る科学的な知識の射程の外部」へと「排泄物的な異質的な要素を解き放つ」のである (IVU, II, pp.62-63 [255-256])。換言すれば、食事と哲学

いずれの場合も、世界を〈同質性〉のもとで所有することを目的とする〈獲得〉と、そのプロセスの限界点において還元し得ない〈異質的なもの〉を〈排泄〉することとが、循環的な関係にあると言える。かくして、バタイユが〈異質学〉でサド的な価値の再提示を行おうとしていることが理解できる。ただし〈排泄〉される〈異質的なもの〉はその還元不可能性から明らかのように、〈獲得〉に予測される帰結として把捉できる類のものではなく、つねに理解不可能な仕方で行われることに留意しなくてはならない。

以上で〈異質学〉の概観はなされたが、第5節で〈社会〉と関連付けて論じることを目指して、〈異質学〉の方法と実践についてもう一步踏み込んで論じなければならない。というのも〈異質学〉は〈異質的なもの〉を科学に反して断言するだけでなく、科学の領域であるところの〈同質的なもの〉を限界まで突き詰めることを求めるのであり、その科学的方法あるいは実践面から〈社会〉という語が重要なものとなるからである。

バタイユの〈異質学〉は、精神分析学や文化人類学、フランス社会学などを援用している。またこの援用は、〈異質的なもの〉を証明するような仕方で行われている（例えば、無意識的な〈排泄〉の欲望を精神分析学が明らかにしたことや、生産物を破棄する〈異質的な〉行為についての社会学的な調査資料という形で展開されている（*IVU, II, pp.65-66* [260-262])). 差し当たり科学は、〈異質学〉の〈獲得〉として然るべき働きを見せている。

しかし科学が〈獲得〉する学知はただ理論上でのみバタイユの興味を惹く、〈同質的なもの〉である。バタイユによれば、「客観化された異質性とは、抽象化された形態の下でしか考察されていないという欠陥」が人間性の文脈から認められるものであり、「それに対して、個別の要素の持つ主観的な異質性だけが、実践的には具体的であり得る」（*IVU, II, pp.63-64* [257-258])). そしてさらにバタイユは「異質学の実践的な部分」は「同質性という性質に向かって後退することに断固として抵抗する」（*IVU, II, p.64* [259]))と述べた上で、〈異質学〉の実践へと向かう。

科学的実証も手伝いながら、人間的秩序の下で成されてきた「ごまかし」が暴かれると、人間は「自分の知性と徳ばかりでなく存在の理由 (*raison d'être*) をも、おおっぴらに彼の排泄器官の持つ暴力性と不作法さに結びつける可能性を獲得する。それは、通常は放蕩の中で始まりつつ、異質的な諸要素の媒介によってトランス状態にさせられるという、人間が〔本来〕所有している能力に結びつくことでもある」（*IVU, II, p.65* [261])). 人間の「存在理由」にまで〈異質学〉を結びつけたバタイユは、停滞した社会の〈排泄〉的段階における「社会革命 (*la révolution sociale*)」という実践的な部分を示唆している（*IVU, II, pp.66-67* [261-263])). つまりバタイユが〈異質学〉の名において実践的に成そうとしていたのは、ファシズムやマルクス主義的風潮の両者に反抗しながら、不合理的でさえある、人間存在そのものに結びついた〈排泄〉の革命を起こすことであつたと言える。

さらにニーチェのディオニュソス的な究極の経験を視野に入れれば、「存在理由」という言葉について、〈異質的なもの〉を含めた人間へのバタイユ的な生の肯定を読み込むことも

できるだろう⁵。しかし〈排泄〉としての革命とバタイユ的な生の肯定についての考察は展開せず、以下では〈異質学〉の本質的な要素である〈物質〉について考えていく。

4 低次唯物論と〈物質〉

前節まではバタイユにおける〈異質学〉について、その発生から実践までを確認してきた。そこで〈異質学〉の形成に関する状況的な説明に留まっていた観念論批判について、本節ではよりバタイユに内在的な仕方では——『ドキュマン』誌における唯物論と〈物質〉という語に着目して——考察していく。というのも、バタイユは〈異質学〉を提唱しているテキスト群においても、この時期の〈物質〉の性格を引き継いで論を進めているからである。そして〈物質〉をペンやリンゴのような物とする粗暴な理解であれば、彼の〈異質学〉の主張が不明瞭になるからでもある⁶。

さて1929年に創刊された『ドキュマン』誌は、視聴覚的な資料を手掛かりにした論考で形成されており、そこで主導的な立場にあったバタイユは足の親指から、花言葉、太陽に至る多様な主題を取り扱っている。それらのテキストでバタイユは、醜い足の親指が持つ倒錯的な魅力と高尚な美の魅力との関係を転覆させたり、花言葉の美しい理念を取り払った生殖器たる花のおぞましさや、最も醜くかつ最も美しい太陽の両義性などを呈示したりしているのである⁷。

諸論文からバタイユの立場を要約すれば、それは低俗なものが高貴なものとの相互交流する不定形の運動性を主張するものであり、彼は主張の根拠として醜悪な事物や、低次な物質が観念的な範疇を逸脱する事例を挙げている。この立場の確認と、〈物質〉についての理解を進めるため、連載「批判的辞書」の「唯物論」を読解する。

大部分の唯物論者は、いかなる精神的な実体も排除しようとしたが、しかし彼らが描写できた物事の秩序は、位階的な関係によって観念論 (*idéaliste*) 特有の特徴を帯びていた。彼らは、さまざまな次元の事実が示す因習的な位階の頂点に、死せる物質 (*la matière morte*) を据えてしまったのだが、そうして自分たちが物質の観念論的な形態、つまり物質のあるべき姿 (*devrait être*) になにより近い形態の妄想に屈したことには、気付かなかつたのである。(M, I, p.179 [57])

バタイユは、大抵の唯物論が観念論的な唯物論となっている旨を批判している。観念論については第2節でも見たが、引用箇所でもやはり攻撃されており、この攻撃が以下で見る唯物論へ結びついている⁸。バタイユによれば、観念論的な唯物論において〈物質〉は「死せる物質」となり「あるがままの (*bruts*) 現象の直接的な解釈」を与えられていない (M, I, p.180 [58])。直接的な現象から離れている点について非難する彼において、「死せる物質」とは観念化された物質であると解釈してよいだろう。つまりバタイユは「あるがまま」の〈物質〉

が人間的理性の範疇へ閉じ込められて、「あるべき姿」を強いられている点に不満を抱いているのである。このことから逆説的に、観念論の操作を免れるかぎり、人間は〈物質〉へ直接的に接近することができると言える。バタイユの主張する唯物論は、観念論批判の延長線上で、より積極的に「あるがまま」の〈物質〉を直接取り扱おうとする立場なのである。では直接的に接近される〈物質〉とは何か。

『ドキュマン』誌の「低次唯物論とグノーシス」(以下「低次」)でバタイユは、自身の唯物論を低次唯物論 (*le bas matérialisme*) と名指して、グノーシス主義における悪や物質への肯定——善と完璧さを目的としているにもかかわらず——に結びつけている。そこでバタイユは「物質を自律的な (*autonome*) 永遠の存在を持つ積極的原理 (*principe actif*) と考えている点を、グノーシスの中心思想」(*BM, I, p.223 [156]*) と見なし、キリスト教的一元化(同質化)からグノーシス主義(〈物質〉)を救い出そうとしている。彼はグノーシス主義の二元論——譲歩的にだが穢れや物質を認める二元論——が「社会的な必要性に迎合して去勢されていない」(*BM, I, p.223 [155]*) こと、すなわちグノーシスにおいてはあらゆる観念論的還元を反抗する〈物質〉が保たれているということを説明しているのである。

このようにグノーシス主義への高い評価は、「去勢されていない」〈物質〉を扱おうとしている点から来るものであるが、加えてバタイユは、外的な権威(「私という存在に、この存在を補強する理性に借りものの権威を与えかねないいかなるもの」(*BM, I, p.225 [158]*))に従属しない〈物質〉を主張している。従ってバタイユの〈物質〉は、いかなる抽象化にも反抗する〈物質〉、そしてその存在を権威抜きに肯定する自律的な〈物質〉である。

〈物質〉への接近について言えば、バタイユは低次唯物論と観念論との関係をグノーシスとアカデミズムとの関係に比較しながら、グノーシスの古銭に見られる怪物的な形態の発露について以下のように述べている。

グノーシス特有の反応は、古代のアカデミズムと根本的に矛盾する形態の形象化にいたったため、この比較の意義は高まる。それらの形態において、その低次な物質のイメージを見ることができるのであり、ただそれだけが、その突飛さと衝撃的な無礼さによって、知性 (*l'intelligence*) を観念論の強制から逃れさせるのである。さて、同様の意味で今日において、造形的形象化 (*figurations plastiques*) は断固たる唯物論の表現である。(*BM, I, p.225 [160]*)

これは「低次」の結論部であるが、その結論とは怪物的造形の形象化をバタイユ的な唯物論の実践として提起することである。バタイユによれば、グノーシス的な形態がその突飛さによって、観念論的なアカデミズムによる還元から引き剥がされることで〈物質〉が直接的に表現される。つまりバタイユは、観念論を造形的形象化によって打破し、権威に従属しない「あるがまま」の〈物質〉へ接近しようとしているのである。この還元への拒否は第3節までに見た〈異質学〉と同じ態度である。かくして〈物質〉という語が用いられる際の「あ

るがまま」という強調点、及び〈物質〉と〈異質的なもの〉の理論的一致を結論できる。ただしその実践段階における差異、すなわち〈物質〉の「形象化」と、〈排泄〉的な「社会革命」との差異は残存している。この差異は〈異質学〉の念頭にある問題意識が、危機的な社会に対する政治的实践にあったことに由来すると考えられる。当時のバタイユは〈社会〉を鍵語の一つとして〈異質学〉を政治的に応用しなければならなかったのである。

バタイユの低次唯物論による〈物質〉への接近は「心理的、あるいは社会的事実に直接的に基づく」必要がある (*M, I, pp.179-180* [58])。この記述からは、バタイユが科学的根拠を求めて社会学的な知を援用していたことが想起させられる。しかし〈異質学〉における社会とは、科学的な知と言うだけで済む内容ではなく、〈異質的なもの〉を経由して〈物質〉と接続される〈社会〉としても取り扱われなければならない。

5 社会学の知と〈社会〉

「ファシズム」におけるバタイユは聖なるもの (*le sacré*) が〈異質的なもの〉の限定した形態であると見なしている。彼はその流れのまま、〈異質的なもの〉の定義として「ふだんの(日常の)生活との関係では、全く別であるもの (*tout autre*)、通約不能であるもの」(*SP, I, p.348* [27]) を提案する。その後バタイユは〈異質学〉をファシズム分析に応用し、強権的な〈異質性〉が〈同質的な〉秩序を敷くさまを描き出す。最後にファシズムへの対抗手段として——〈異質的なもの〉を捨象しない全体的な人間を肯定しながら、「人間の生の解放を追求し続ける深々とした転覆の動き (*la profonde subversion*)」(*SP, I, p.371* [67]) として——〈異質学〉の実践を試みている¹⁰。

「ファシズム」に関する見通しを持ったところで、本節で着目するのは次の二点である。すなわち、「ファシズム」において社会学が〈異質的なもの〉を理論的な水準で証明するために用いられている点と、〈社会=聖なるもの〉が〈異質的なもの〉の一形態として持ち込まれている点である¹¹。

バタイユは「ファシズム」で社会学を援用しているが、彼にとって科学とは、あくまで〈同質的なもの〉の〈獲得〉を試みるものであり、ともすれば〈異質的なもの〉を同質性へ還元する作業でさえあった。しかしバタイユは、〈獲得〉と〈排泄〉の周期性を主張して〈異質学〉を形成したのであり、そのように形成された〈異質学〉は〈獲得〉としての〈同質性〉の探求を要求している。

同質性の研究は、異質性の研究の第一部を構成する。というのは、異質性は最初、同質的でないものとして定義されるが、このやり方は、同質性について知識を持っていることを前提とし、この知識が排除によって異質性の境界を定めるからである (*SP, I, pp.343-344* [21])。

バタイユは〈異質学〉が無反省に〈異質的なもの〉の存在を主張するだけの立場に留まらないために、〈同質的なもの〉から出発しなければならないと考えている。そして彼は「ファシズム」において用いる〈同質性〉を「諸要素の通約可能という性格、およびこの通約性を意識していること」(SP, I, p.340〔14〕)として定義し、さらに詳しく解説している。

社会的同質性の基盤は、生産である。同質的な社会とは、生産する社会、すなわち有用な社会である。〔……〕同質的な活動は、それ自体で価値を持つ (*valable en soi*) 活動というかたちには到達することはけっしてない。〔……〕社会的な同質性とそこから生じる活動の基盤となる共通の尺度は、金銭、すなわち集団的な活動を通して現れるさまざまな生産物の間に、数字による等価性を成り立たせる金銭である (SP, I, p.340〔14-15〕)。

バタイユが〈同質性〉として認識するのは、共通の尺度(金銭)によって測り得る領域である。この引用に併せて既に見た「ごまかし」を思い出せば、人間についてのバタイユの認識——人間は有用性の支配下で生命や社会を合理的に保持するという認識——について再確認することができる。であるならば〈同質性〉とは知的に理解可能な領域全般であると言えるだろう。こうした〈同質性〉の領域を確定するために、科学が必要となるのである。

バタイユは、〈異質的なもの〉を探求するための科学的前提として、デュルケムの聖俗二元論を採用している¹²。従って彼が〈異質的なもの〉へ与えた定義は、聖俗二元論を継承した結果であると言える。すなわち〈異質学〉においてデュルケム社会学は、〈同質的な〉領域と〈異質的な〉領域の画定という役割を果たすのである。このような〈同質性〉の研究によってこそ〈異質性〉の探求が開始される。かくして、その〈同質性〉の研究のために——〈異質的なもの〉を理論的な水準で証明するために——バタイユが社会学を用いている点を理解することができる。しかしバタイユはデュルケムにおける聖俗二元論への同意を示しながらも、それだけでは十分でないと批判している。すなわち、デュルケムには〈異質学〉の実践たる〈異質的なもの〉へ直接的に接近する部分が足りていないと批判しているのである(同時に〈同質性〉の探求として見ても不完全であると考えている)¹³。

ここで本稿は、当初の問題設定に立ち戻って〈異質的なもの〉であるところの〈社会〉について考察する。その考察を経て、〈異質的なもの〉としての〈社会〉がいかにして〈物質〉と合流するかが問題となるのである。バタイユはデュルケム的な「社会的沸騰(*effervescence sociale*)」という語彙——「集合的沸騰(*effervescence collective*)」を思わせる語彙——を用いて「社会的な異質性」を取り扱っている (SP, I, p.343〔20〕)。デュルケムにおいて聖なるものとは〈社会〉であり、バタイユもそのように彼を読んでいる¹⁴。デュルケムの宗教論を大雑把にまとめておけば、以下ようになる。

デュルケムは、宗教が時代や地域によって様々に異なる具体的な形をとることから、宗教性を観念論的に思索する方法を退ける。より正確に言えば、彼がとる立場は、宗教を明らか

にするために最も有効な原始的宗教の資料解釈に基づいて、宗教を社会的なものとして捉える立場である。そして彼の理論において聖なるものとは、ある共同体において集合的な〈物(chose)〉として実在し、諸個人へ禁止や昂揚をあたえて結束させる高次の威力として性格付けられている¹⁵。さらに聖なるものは両義的な力(=浄と不浄)が一体となった事象であると考えられており、とりわけ昂揚を与える宗教的な力に関して、諸個人が脱我状態へ陥って交流(感染)し、単なる個人の総計でない仕方で存在する集合そのものが語られるとき、それは「集合的沸騰」と名指される。デュルケムにおける宗教の浄の部分(結合力を高めて禁止と秩序を与える象徴、神話など)についての議論は割愛するが、バタイユは浄なる秩序を〈同質的なもの〉として、不浄なる集合的沸騰を〈異質的なもの〉として捉え直している。というのも、沸騰の最中にある人間とは脱我状態にあり、合理的な知性の「ごまかし」を喪失しているからである。

バタイユにとって秩序を与えられた共同体は〈同質的〉であり、そこでは有用性の経済が支配している。しかし彼は〈同質的〉な社会における〈異質的なもの〉の〈排泄〉によって、「異質的な社会領域」が形成されると考えている。それは例えば集合的な殺戮行為、あるいは社会全体の痙攣状態という〈異質的な〉〈社会〉であると理解してよい¹⁶。さらに言い換えれば、前者はファシズムが用いた〈異質的なもの〉であり、後者はバタイユがファシズムを乗り越えようと構想した転覆行為である¹⁷。つまりバタイユは〈異質的なもの〉としての〈社会〉を認め、〈異質学〉の応用としてそれを探求しているのである。以上の読解を踏まえた際、〈異質学〉を通して合流する〈社会〉と〈物質〉は整合的に語り得るものであるのか、最後に総括を兼ねて考察する。

6 終わりに

前節までに見てきた通り、〈異質学〉での観念論批判は『ドキュマン』誌における低次唯物論の時代から継続した態度である。そして「あるがまま」の現実を抽象化せずに露呈させることで接近され得る〈異質的なもの〉という文脈で、観念論批判と重なりながら〈物質〉という語が用いられる。また〈異質学〉には〈同質性〉の探求が前提されており、社会学が援用される。しかしこの前提的な社会学の〈獲得〉とは異なるニュアンスで、〈社会〉が〈異質的なもの〉として存在している。このこと要約すれば以下ようになる。〈異質学〉において〈物質〉という語を用いることで、「あるがまま」に、外的権威に依らずに存在しているという点を強調できるのであり、このことで〈異質的なもの〉が総じて即物的であるということを意味しているのではない。他方で〈社会〉という語について言えば、デュルケム的な秩序を与える〈社会〉の場合は、知の領域に留まる〈同質的なもの〉でありながら、バタイユにおける転覆の場合は、「ごまかし」に覆われていない〈異質的なもの〉としての〈社会〉が実践のレベルで保持されるのである。

こうした理解に基づいて、この二つの語彙が用いられている「同質的な社会が物質的に分解〔解離〕して (*matériellement dissociée*) 形成される異質的な社会領域」(*SP*, I, p.343〔21〕) という一節を紹介しておく。この一節が意味しているのは、抽象化による「ごまかし」が暴かれて〈同質性〉が分解——精神分析学の術語では解離——し、その際〈異質的な〉〈社会〉が〈排泄〉され、それは「あるがまま」に存在するという内容である。

かくして〈物質〉と〈社会〉という二つの語に関する考察を通して、一貫したものとしてバタイユの思想を読む仕方が呈示された。ここで差し当たり、本稿の目的は達成されたと言えるだろう。つまり本稿はバタイユの〈異質学〉を概観し、その付近の諸論文との連関を緊密なものとして考察したうえで、この考察に伴って〈物質〉と〈社会〉という一見突飛な語彙連関を整理することで、バタイユが当時いかなる脈絡において思索していたかを、断片的に解明したのである。

バタイユは〈異質学〉として政治的、宗教的、思想的なあらゆるものに対して反抗する領域を探求しているが、この探求の先にある〈異質的なもの〉はアカデミアの範疇を逸脱しているだろう。従ってバタイユの思索をさらに推し進めるための筆者の課題は、改めてバタイユのテキスト群から彼の態度と思索をより厳密に読解しながら、本稿で社会学に触れたように〈同質性〉の探求を徹底することである。加えて言えば、この〈異質的な〉領域が聖性のモチーフと結びつけられていることから、本稿はバタイユにおける聖性研究の一環と題することができるだろう。

凡例

- ・バタイユの著作からの引用はガリマール社の全集 (*Georges Bataille, Œuvres complètes, Tomes I-XII, Paris, 1970-1988*) を用いて、書誌情報は論文 (著作) 名略号+全集巻数+頁数という体裁を採って文中に記載する。邦訳のあるものは参照し、欧文の書誌情報の後、〔〕内に頁数を付記している。
- ・論文 (著作) 名に関しては以下の略号を用いる。

VT: *La « vieille taupe » et le préfixe sur dans les mots surhomme et surréaliste, Œuvres complètes, Tome II, pp.54-69, Gallimard, Paris, 1972.* (『老練なもぐら』と超人および超現実主義者なる言葉に含まれる超という接頭辞について)『物質の政治学——バタイユ・マテリアリストI』吉田裕訳、209-239頁、書肆山田、2001年。)

VU : *La valeur d'usage de D.A.F de Sade(I), Œuvres complètes, Tome II, pp.54-69, Gallimard, Paris, 1972.* (「サドの使用価値」『物質の政治学——バタイユ・マテリアリストI』吉田裕訳、240-269 頁、書肆山田、2001 年。)

SP : *La structure psychologique du fascisme, Œuvres complètes, Tome I, Gallimard, Paris, pp.339-371, 1972.* (「ファシズムの心理構造」『物質の政治学——バタイユ・マテリアリストII』吉田裕訳、13-71 頁、書肆山田、2001 年。)

M : *Matérialisme, Œuvres complètes, Tome I, Paris, pp.179-180, 1972.* (「唯物論」『ドキュマン』、57-59 頁、江澤健一郎訳、河出書房新社、2014 年。)

BM : *Le bas matérialisme et la gnose, Œuvres complètes, Tome I, pp.220-226, Paris, 1972.* (「低次唯物論とグノーシス主義」『ドキュマン』、149-165 頁、江澤健一郎訳、河出書房新社、2014 年。)

・引用文中で省略する際は〔……〕を用い、筆者の補足は〔〕内に記述する。

注

¹ 吉田 (2001) は政治的な情勢を踏まえた精密な生成研究を行っており、石川 (2018) や佐々木 (2021) の鋭角な主題からの研究も、厳密な仕方では思想の発生を論じている。さらに、市川 (2005) は、〈異質学〉の発生について正面から論じている。しかし生成研究を蔑ろにバタイユの複層的な思想を考察することは不可能であり、筆者のバタイユ研究もテキスト読解から出発する必要がある。

² 〈異質学〉のテキスト群における執筆時期については、主題同士の接続性から吉田 (2001) が推測した順番 (「老練な」→「サド」→「ファシズム」) に依拠している。

³ Michel Surya (1987) は、政治情勢を主とした周縁的な状況からバタイユ自身の内在的な思想まで総観している。本稿はバタイユの伝記的事実やシュルレアリスム運動の振る舞いに関して、シュリヤの情報に依拠している。

⁴ 題目に採用されている「もぐら (taupe)」という語について触れておけば、ブルトンのような上方志向が——革命を起こすべくして一度社会を俯瞰しながらも再びその上空に君臨する——「鷲 (aigle)」として描かれているのに対し、下方から (群衆、労働者によって) 革命を引き起こしてなお、その後〈超〉と形容されるような価値を捏造しない態度 (バタイユが理解していたマルクスの態度) が、自ら進んで低俗な地中を掘り進める「もぐら」に例えられているのである。そして「鷲」がさらに太陽やイカロス、プロメテウス、イデアと、「政治的には皇帝崇拜と同一視される」(VT, II, p.96 [215]) と言われるとき、バタイユは革命運動そのものをではなく、革命後の強権的な支配を拒否している。

⁵ バタイユの読んだニーチェは、ディオニュソス的な自己解体の体験という文脈と、ニーチェの超人思想にも向けられ得る超越的なものへの批判という文脈が交差したものである。バタイユのニーチェ読解については、Warin François (1994) が主題化している他、雑誌『無頭人 (Acéphale)』においてバタイユと共にファシズムからのニーチェ奪還を試みた P・クロソウスキー (1905-2001) が、『我が隣人サド』(1947) でバタイユとニーチェを論じている。

⁶ ここで〈異質学〉における〈物質〉について例示しておく。「老練な」においては「精神を持ち上げて物質的欲求 (besoins matériels) に対する嫌悪を神聖だとしている空論家どもを打ち倒せ！」(IV, II, p.109 [238]) という言葉を見出せる。この「物質的欲求」は心理学的な意味で「精神的欲求」の下層に位置づけるものとして把握することもできる。しかし〈物質〉による観念論批判を超えて性、健康や安全などの物質的な快をバタイユが推奨しているかどうかには留保が必要である。

そして「サド」で現れる〈物質〉についての記述は、「排泄される物質あるいは幽霊は、無限な時間や空間と同じような特別な性格を持つが、この性格については、それを測る共通の尺度が考えられないとか、非合理的であるとか言いたいいくつかの否定的な言い方をされ得るだけである」(VU, II, p.63 [257]) がある。このように〈物質〉は、定義不可能性を表すための手段として用いられており、差し当たり〈異質的なもの〉≡〈物質〉の構図で読むことができる。

最後に、「ファシズム」において〈物質〉は後景化するものの、そこでバタイユは「知的な還元を先行して存在する物質に直接接近すること」(SP, I, p.345 [23]) を——〈同質性〉を経由せずには困難であると認めつつも——依然として求めている。さらにデュルケムや L・レヴィ＝ブリュル (1857-1939) に基づいて「聖化された事物 (les choses sacrées)」およびその具体例 (陰部、排泄物、暴力と戦士) が持ち込まれる他 (SP, I, 347 [25])、「醜い形態」(SP, I, p.350 [31]) という両義的性格 (魅惑と嫌悪) を含んだ概念が『ドキュマン』誌から引き継がれている (この注釈内での強調は筆者による)。

⁷ この雑誌については、〈不定形 (informe)〉に着目した Georges Didi-Huberman (1995) をはじめとした美学の領域から多く言及されている。また Boyan Manchev (2009) は〈他化 (altération)〉という主題のもとで『ドキュマン』誌と〈物質〉を論じている。

⁸ バタイユの観念論への反抗については、ニーチェとドストエフスキー、それらをバタイユへ教えた L・シェストフ (1866-1938) における、理想主義の排除と地盤喪失 (bespočvennosti / dépaysement) たるニヒリズムに由来すると考えられる。バタイユの思想形成をさらに明確化するためにニヒリズムの問題についても改めて問い直さなければならない。バタイユとシェストフの関係については酒井 (2018) に詳しい。

⁹ 横田（2020）はバタイユの唯物論を検討し、その意味への還元不可能性を「裸」のモチーフへ接続して「脱ぎ去りの思考」として捉え、バタイユの主著『内的経験（l'expérience intérieure）』における「非-知（non-savoir）」まで横断して論じている。

¹⁰ Emmanuel Tibooux（2001）は、バタイユの科学を利用しながらも科学に反する態度を、「転覆」という語に着目して説明している。

¹¹ 本稿では、精神分析学やデュルケム以外の社会学的援用について保留にして議論を進める。ただしバタイユはフロイト的な意識と無意識との関係を、〈同質性〉と〈異質性〉との関係と類比的に語り得ると考えており、精神分析学が〈異質学〉における重要な要素の一つであることを断っておく（*SP*, I, pp.344-345〔23〕）。

¹² バタイユは聖俗二元論の他にも、デュルケムからの影響を受けていると考えられる。すなわち聖なるものの両義性、聖なるものの伝染的性格、個人の集合である以上の〈社会〉としての聖なるものという認識がバタイユへ継承されている。前二つについては必要な限り触れるに留めるが、最後の〈社会〉については後に取り扱う。

¹³ このバタイユの不満は、デュルケムの「科学的な（scientifique）」という性格故に必然的に起こるものであるが、バタイユが〈社会学研究会〉という共同体を創始する際、より顕著に表れている。そこでバタイユは、原始社会の研究に留まる社会学に対して、現代を研究の対象にすること、及びその〈社会学研究会〉を〈精神的共同体（communauté morale）〉として実践的な共同体とする旨を宣言している。

¹⁴ デュルケム的な聖なるものについて、バタイユは以下のように注釈している。「デュルケムは、彼の分析の結果として、聖なるものを社会的なものと同一視するに至ったが〔……〕この同一視は、射程がどれほどであるとしても、直接的に意味のある定義をもたらすという効力は持たなかった（それは、根本的に異質な要素がはっきりと現れてきたときに、それを逃れようとして同質的な表現を置くという科学の偏向性をよく表している）」（*SP*, I, pp.345-346〔68〕）。

¹⁵ 岡崎（2020）は、即物的なものとして捉えられた「物」が誤謬であるとし、慎重に論じている。岡崎によればデュルケムにおける「物」とは一個人の観察からは導出され得ない——カントの「物自体」と接近する——未知のもの、外的な力としての社会的事象を意味している。このような「物」についての理解は、本稿で解釈するバタイユの〈物質〉と、その未知という性格において接近し、科学の学知からは〈排泄〉されるという点で距離をとるものである。

¹⁶ 「サド」の結論部で用いられている「痙攣（convulsion）」は、バタイユが笑いや性の体験を語る際に付随する身体的な性格を帯びた語である。

¹⁷ その転覆の実践とは何であるのか。たしかに〈異質性〉をごまかさずに〈物質〉へ接近することではあるが、「サド」においては曖昧なままである。さらに彼が当時戦争へ抗おうとして行った企画は総じて効果を発揮できずに瓦解しており、その実践の詳細については改めて論じ直さなければならない。

参考文献

石川学『ジョルジュ・バタイユ——行動の論理と文学』、東京大学出版局、2018年。

市川崇「異質なものとその運命：ジョルジュ・バタイユの『ファシズムの心理構造』に見る「異質性」の概念の起源とその射程について」『藝術研究 85 巻』、142-169 頁、慶応義塾大学文学会、2005 年。

岡崎宏樹『バタイユからの社会学——至高性、交流、剥き出しの生』、関西学院大学出版会、2020 年。

酒井健「若きバタイユとシュエストフの教え——『星の友情』の軌跡」『言語と文化 15 巻』、29-53 頁、2018 年。

佐々木雄大『極限の思想——バタイユ エコノミーと贈与』、講談社、2021 年。

山崎亮『デュルケム宗教学思想の研究』、未来社、2001 年。

横田祐美子『脱ぎ去りの思考——バタイユにおける思考のエロティシズム』、人文書院、2020 年。

吉田裕「バタイユ・マテリアリスト」『異質学の試み——バタイユ・マテリアリストI』、13-81 頁、書肆山田、2001 年。

André Breton, *Second manifeste du surréalisme, Œuvres complètes, Tome I*, 1988[1930], Paris. Gallimard, pp.775-833. (アンドレ・ブルトン「シュルレアリスム第二宣言」『アンドレ・ブルトン集成 5 巻』、生田耕作 田淵晋訳、57-123 頁、1970 年。)

Pierre Klossowski, *Sade mon prochain : Précédé de Le philosophe scélérat*, Seuil, 2002[1947]. (ピエール・クロソウスキー『我が隣人サド』、豊崎光一訳、晶文社、1991 年。)

Georges Didi-Huberman, *La ressemblance informe ou le gai savoir visuel selon Georges Bataille*, Macula, 1995.

Émile Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, Paris, PUF, 2003. (エミール・デュルケム『宗教生活の原初形態 上・下』古野清人訳、岩波書店、1975 年。)

Boyan Manchev, *L'altération du monde : Pour une esthétique radicale*, Ligne, 2009. (ボヤン・マン
チェフ『世界の他化 ラディカルな美学のために』、横田祐美子 井岡詩子訳、法政大学出
版局、2020年。)

Emmanuel Tibloux, *Georges Bataille, la vie à l'œuvre. "L'apéritif catégorique" ou comment rendre
sensible l'intensité de la vie affective*, *L'Infini*, n° 73, pp. 49-63, 2001.

Michel Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre*, Librairie Séguier Paris, 1987. (ミシェル・シュ
リヤ『G・バタイユ伝 上・下』、西谷修 中沢信一 川竹英克訳、河出書房新社、1991年。)

Warin François, *Nietzsche et Bataille : la parodie à l'infini*, PUF, Paris, 1994.